

最悪期よりは明るい面も 日系団体には活動休止のリスク

—ブラジル『ニッケイ新聞』 深沢正雪編集長に聴く—

インタビュアー 堀坂 浩太郎

ブラジルの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、12月末の時点で米国、インドに次いで世界第3位、約762万人に達し、死者も同2位の19万人余と極めて深刻な状況となっている。日本の23倍を有する国土全体に広がり、かつ所得格差が大きいこともあり、貧困層や黒人・混血層の生活に及ぼした打撃は大きい。世界最大といわれる日系社会もCOVID-19感染に脅かされている。そこで、ブラジル唯一の日刊邦字紙（デジタル版）『ニッケイ新聞』（Jornal Nikkei Shimbun）の深沢正雪編集長に、現況とウィズ・コロナ、アフター・コロナについて、日頃の取材・報道を通じてどのように受けとめられているか聞いた。



< 深沢正雪（ふかさわ まさゆき） >

1965年、静岡県生まれ。三重大卒。92年からサンパウロ市の『パウリスタ新聞』で研修記者、95年に一旦帰国。群馬県大泉町のブラジル人群像を描いた作品『パラレル・ワールド』で99年に潮ノンフィクション賞受賞、出版。2001年にニッケイ新聞入社。04年から編集長。著書に『移民と日本人』（無明舎、2019年）など多数。

『ニッケイ新聞』の取材・編集過程を通して、コロナ発生後のこの9か月、ブラジル社会の変化をどう受け止めているのか。

6月まではほぼ経済がストップしていた。だが徐々に外出自粛規制が緩和され、今では経済活動がかなり元に戻っている。本紙8月28日付「第2四半期GDP ブラジルの落ち込みは小さめ？ 欧州やラテンアメリカ諸国と比べ回復のペースは緩やかか」のように、落ち込みが小さくて済んだのは、農産物や鉄鉱石などのコモディティの生産・輸出、政府による低所得者や企業への支援などが奏功したためと見られている。

本紙11月27日付「10月は39万5,000人弱の雇用純増 今年の累積ではまだマイナス」にあるように、10月は正規雇用者数が39万4,989人増えている。ゲデス経済相は、COVID-19の感染拡大によって生じた雇用減はまだ回復しきれていないが、「年末までには純減分を取り戻せる」と見ている。とはいえ、同経済相のこの種のコメントが当たることは少ないのが現実だ。

パンデミック開始直後、本紙6月26日付「IMFがGDP 9.1%減と予測 120年間で最悪の落ち込み」

によれば、この時点でのブラジル中央銀行の景気動向予測「フォーカス」ではマイナス6.5%となっていた。それが徐々に上方修正が繰り返され、本紙11月24日付「フォーカス インフレ予想3.45%にGDPは4.55%減予測」にまで良くなってきている。

問題は、パンデミック対策で巨額を使っているために、財政収支が急激に悪化していることにある。本紙8月11日付「財政収支7千億レアルの赤字 コロナ対策で大盤振る舞い 公的債務GDPの117%説も」にあるとおり、19年に公的負債がGDPに占める割合は75.8%であったのが、20年にはそれが98.2%にまで上がる見込みだ。これはブラジル史上で最大の赤字額であり、リーマン・ショックによる金融危機直後の2009年の約6倍の額で、2013年から19年までの債務を足したものに相当する数字になってしまう。それだけ債務が激増する中で、インフレが上がっているのが今後の注意点だ。

その中で、日系社会に及ぼした影響は。

デカセギは完全にストップした。貴重な財源だったイベント収入がなくなったため、全ブラジルに約500とも言われる日系団体はいずれも経営状態が非常

に厳しくなっている。特に IPTU(都市不動産所有税)などを払う会館を持つところほど負担は重い状況だ。日本語学校や地方の日系団体の 2 割程度が活動のオンライン化を果たし、5 割程度は活動休止で再開待ち、3 割が解散に追い込まれる可能性があると感じている。

青年部などがある団体、若者が活動に積極的に参加している団体は、イベントをオンライン化するなどして収益を確保しているところもある。だが、全体としてみれば、ごく少数と言わざるを得ない。今回のパンデミックが日系社会の活動に及ぼしたマイナスの影響は計り知れないものがある。

日本では「単なる風邪だ」と豪語したボルソナーロ大統領の発言がマスメディアでも再三取り上げられ、政府のコロナ対策への足並みが揃っていない印象を受けている。世界的に「ウィズ・コロナ、アフター・コロナ」が言われる昨今だが、ブラジルらしい、ブラジル人らしいと映る対応がきつとみられるのでは。

あくまで私個人の皮膚感覚での答えだが、ブラジルのコロナ対策は、連邦政府と市・州レベルで噛み合っていない。それが現実といえる。その結果として、世界 2 位の死者数、3 位の感染者数となっている。

これは、民政移管してわずか 35 年の現在、「何が民主主義か」を政治家、学者、企業家、国民が暗中模索している結果なのだと感じている。ブラジルの民主主義は非常にダイナミックだ。「多数決」を基本原則としながらも、「少数意見重視」という意見も根強く、時代時代でバランスが左右にゆれ動き、ときにチグハグさとなる。

というわけで、「噛み合わない」こと自体がダイナミックさの一断面であり、時間をかけて国民がかみ合わせていく過程が、「ブラジル式民主主義の伝統」なのだと思う。そのスタイルが生まれるまでに、もう一世代、数十年かかると思われる。

本インタビューに応じた 11 月末現在、感染者や死者が再び増加傾向にあり「新型コロナ第 2 波到来か」との論調がメディアでは強い。増加傾向にあることは、集団免疫に達していない証明でもある。スウェーデンと違って、ブラジルは集団免疫を目指してはいないといえる。

先進国のように効果ある外出自粛ができないために感染が広まり、死者は毎日 1,000 人以上という状態が 5 月末から 10 月まで続いた。その結果、すでに



ニッケイ新聞

17 万人以上の死者がでており、サンパウロ市では市民の 2 割近くが抗体を持っている状態だ。同型ウイルスである限り、再増加しても欧米ほどは激増しない可能性が高いと見ている。

どの市でも経済が悪いまただ中の再ロックダウン（都市封鎖）は、市民の反発が強い。市は「細心の注意を」と呼びかけているが、ワクチン接種が始まるか、集団免疫状態になるまで、今の実質的な緩和状態を続ける可能性が高いと思われる。

ブラジルのコロナ死者数は今年末までに 20 万人近くに増える可能性がある。これは、国民を犠牲にして「いつが集団免疫なのか」を調べる実験をしている状態ともいえ、「無策ゆえの暴挙」という人もいるだろう。だが、ワクチンができようができまいが、中進国でもできる現実的対処でもある。

今回のようなパンデミックが今後、何年に一度の割合で起きるか分らないが、ブラジルは「繰り返すことが可能な経験」を積みつつあるようには見える。今回のコロナ犠牲者が「無駄死」なのかどうかは、この経験が次に活かせるかで決まるのかもしれない。数十年後に冷静に判断してもらいたいものだ。

進出日系企業の駐在員の多くは帰国したと思われるが、日系企業はどのような動きをしているのか。日本人学校やリモートワークなど駐在員の生活にみられる変化は。

駐在員は先進国の基準にしたがって行動するので、基本的に日本に帰国した駐在員が多いようだ。ブラジル日本商工会議所は年2回、半年間の展望を部会ごとに発表する「部会長シンポジウム」を開催してきたが、パンデミックが始まって中止になった。一般公開しない、会員のみのオンライン形式の報告会に切り替えている。まだまだ、パンデミック前に比較して、業績を表だって語れるところは少ないようだ。

かつてブラジルには日刊邦字紙が3紙あったが、今では貴紙1紙だけだ。最近の変化として、デジタル版に切り替えられたこと、かつ紙面構成も以前は日本のニュースが一面を飾っていたのが、今年に入ってから、ブラジルのニュースが一面を埋めるように変えられた。この変化の狙いは。

パンデミックの間に印刷版の読者が減り、PDF版やWeb版の読者が増えて、その比率が高まった。これは以前からあった傾向が、パンデミックで加速したものだ。PDF版やWeb版の読者は日本在住者や企業関係者が多いのに加え、ブラジル側の読者も社会情勢やコロナ関連情報に関心が高まっていると考え、ブラジルニュースを一面に移した。

紙面をみると読者からの声を重視していることが伺える。コロナ禍でどのような声が上がっているのか。

パンデミックの期間中、読者から聞こえた最大の

声は「新聞をつぶさないで」「できるだけ発行を続けて」という存続を心配する声だ。本当に有り難いことだ。経営的なことは社長しか分らないが、現実にかなり厳しくなっていることは間違いない。

最後に、邦字紙の編集長として、今日の困難な状況下で、特に重視していることは何か。

ちょうど2年前の年末にサンパウロ新聞が廃刊となった。印刷版読者の大半が80歳過ぎであり、それを機に購読自体を辞めた方が多く、ニッケイ新聞に移ってくれた読者は多くはなかった。

私個人としては、これを機に、PDF版やWeb版の読者が過半数にするような思い切った対策が必要ではないかと思った。そのためには、より日本側の読者や企業の方の求めるニュースを掲載する必要があると感じている。

今後の方針としては、ポルトガル語姉妹紙“Jornal Nippak”との連動を強め、ポルトガル語での日本文化や歴史の発信、日本製品などのPRを強めていくつもりだ。ニュースの内容や傾向に関して、要望のある方は、ぜひこのメールまで忌憚のないご意見をお寄せいただきたい。(fukasawa@nikkeyshimbun.jp)

(ほりさか こうたろう ラテンアメリカ協会副会長、
ラテンアメリカ・カリブ研究所長)

ラテンアメリカ参考図書案内



『エクソダス —アメリカ国境の狂気と祈り』

村山 祐介 新潮社

2020年10月 340頁 1,800円+税 ISBN978-4-10-353651-2

著者は朝日新聞ワシントン駐在員であった当時、米国へ向かう移民を取材し、以後もずっとメキシコから米国に移住を試みる人たちを見てきた。米・メキシコ国境の「トランプの壁」で隔てられ引き裂かれた家族を見たサンディエゴ、砂漠と川を挟んでの移民と自警団の攻防のノガレス、貨物列車の屋根に乗って北を目指すメキシコの「野獣」と呼ばれる列車に飛び乗るラパトロナでの光景、米国への移住希望者を多数出し、また多くの中米等からの脱出者が通過している世界最悪の殺人率の国中米エルサルバドル、同じくギャング集団マラスの脅迫から出国を余儀なくされるホンジュラス、さらにアメリカやカリブ海諸国などからビザを必要とせずに入国できるエクアドルに入りコロンビア西北部から危険なダリエン・ギャップ（地峡）の密林地帯を徒歩でパナマに入るルートに至るまで、約3か月をかけて約15,000kmを行き来して18か国のおよそ300人に会って取材した、命懸けで国境を越えようとする人びとの姿を追った渾身の記録。

〔桜井 敏浩〕